
けいおん！ ～唯とギー太と幼なじみと～

hearts666

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ ～唯とギー太と幼なじみと～

【Nコード】

N8554M

【作者名】

hearts666

【あらすじ】

共学となった桜ヶ丘高校に入学した桜井悠斗と幼なじみの平沢唯が軽音部に入部するハメに……

拙い文ですがどうぞお願いします

※ちなみに唯ENDという訳ではありません
その時の気分です！

第一話（前書き）

短くてすみません

第一話

「…おき…おきろー遅刻するぞ〜」

「あア??:…もういい…サボる」

…遅刻??アレ今日って春休みじゃなかったっけ??

「ホラ唯ちゃんも来てるよ〜」

え…遊びに来たのかな??だって休みだし

「もしかしてアンタ…初日からサボる気??」

初日???:…もしかして今日

「イヤーさすが私の息子!元ヤンの私でさえ入学式はちゃんと行っ
たのに…私の想像を超えるほど育っていたとは喜ばしいことだ!」

オレはおもむろにベットの横に立っている母さんに聞いた

「ねえ母さんもしかして今日…入学式??」

「うん」

「ち…遅刻だぁー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!」

布団を即蹴り飛ばしてダッシュで顔を洗い歯を磨き急いで制服を着

て玄関に飛び出した

「唯!! ゴメン!! 寝坊!! ……って何やってんだ!？」

そこにはしゃがんでアリと格闘してる幼なじみの平沢唯の姿があった

「あ!! ゆうくんおはよう! 今ねアリの行列の交通整備してたの!」

満面の笑顔でこっち向いてきたので思わずときめいて赤面してしまった

「どうしたの顔赤いよゆうくん?？」

「う…うるさい!! 早くいかねえと遅刻だぞ!!」

「おお!! そうだった!!」

二人は急いで学校へ向かった

第一話（後書き）

何か言ってくれると幸いです

第二話（前書き）

小説って書くの難しいですね

第二話

入学式から二週間ほどたった後オレは一人で帰っていた

高校生活にも慣れバイトでもしようかなとか思ってたのんびりと歩いていると後ろから

「ゆうくん！！一緒に帰ろう！！」

「唯か……どうかした？？」

「いやたまたま見つけたから一緒に帰ろうかなって思ってた！」

「ふーん」

「そー言えばね和ちゃん酷いんだよ！部活してないからニートだ！
って」

「へー」

オレは興味がないので適当な相づちを打っていた

「と言うわけで私も軽音部に入部してみました！！」

「へー………ってお前なんか楽器使えたっけ！？」

あの唯が軽音部に入ると言う事実にはオレは驚きの色を隠せなかった

「失礼な！私だって楽器ぐらい弾けるよ！！」

「えっ…どんな楽器？」

唯は困った顔をして

「カ…カスタネットとか……」

「すっごく似合う」

「和ちゃんにも言われた…」

同じことを二回も言われてへこんだのか唯はシュンとしていた

「わかったわかった何かあったら相談していいから落ち込むな」

「なら明日の放課後待ってて！」

「えっ!？」

何!？告白か!？いや違う絶対違う落ちつけオレ落ちつけ

顔が赤くなりそうになったが何とか我慢して冷静を装った

そんなことを考えていたらすぐ家に着いた

「じゃあ明日ね！」

唯は明るい声でそう言い残し家に入っていた

明日のことが気になったがオレも隣にある自分の家に入っていた

第二話（後書き）

唯の家が隣っていうことにしました

感想待ってます

人物紹介（前書き）

第三話作ってる時に書いていないことに気づいて急いで書きました…

誤字脱字はすいません

人物紹介

桜井 悠斗

本作品の主人公

唯とは幼なじみだけど中学校時代は親の都合で北海道に住んでいた
しかし中学校三年生の夏に戻ってきた

親は母親しかいないが母親もトラックの運転手なので家にいること
は珍しい

ので生きる手段として料理は作れる

弾ける楽器は母親の影響でギターが弾ける

中学校時代は剣道部に入っていて二段を持っている

平沢 唯

悠斗の幼なじみ

髪の色は焦茶色。ショートカットで、2本の黄色いヘアピンで右の
前髪をとめているのが特徴。若干くせ毛

おっちょこちょいな天然ドジ娘。普段はぼーっとしていることが
多く、のんびり屋でほわわんとした性格。思っていることや考えが
顔に出やすい。様々なドジをやらすが、唯の悪気のない笑顔を見
ると周囲が思わず許してしまう

絶対音感の持ち主

髪の色は焦茶色。ショートカットで、2本の黄色いヘアピンで右の
前髪をとめているのが特徴。若干くせ毛

秋山 滯

やや吊り目で、つやのある長い黒髪を垂らしているのが特徴。前髪は姫カットにしている。

大人びたルックスや姉御口調とは裏腹に人見知りが激しく寂しがり屋で、痛い話題や怖い話題が苦手な繊細な性格。

成績は優秀で教えるのも得意。また、勉強だけではなくスポーツも万能

田井中 律

軽音楽部部长

ショートカットにカチューシャをしている。薄茶色の髪をしているが、染めているわけではなく地毛である。

滯と同様ぶっきらぼうな姉御口調で話し、振る舞いはストレートかつ大雑把で豪快だが、周りへの気配りが上手で、部内の空気を明るく盛り上げたり、和ませるのを得意とする社交的な性格である。

特技はナレーション喋り、チョークスリーパー、声真似

琴吹 紬

眉毛がとても太く、天然パーマの髪をロングヘアにしている。髪の色はクリーム色で、瞳の色は濃い青。

家に執事があり、各地に別荘を所有する大企業の社長令嬢だが、他の部員に対して自分の家柄を鼻に掛けることはない（それでも、「庶民」の感覚とややズレている

中野 梓

1学年下で小柄な体格で黒髪のロングツインテールが特徴。瞳の色は赤みがかった茶色。
真面目で純粋な性格だが、いじられたりからかわれたりすると、ムキになったり滯以上に大げさなりアクションで恥ずかしがったりする子供っぽい面もある

山中 さわ子

桜が丘高校の音楽教師で吹奏楽部兼軽音楽部の顧問
眼鏡を着用しており楕円レンズのフレームレスを常用している。

真鍋 和

ボーイッシュなショートカットと太枠メガネが特徴。
寡黙で落ち着いた性格。高校で部活動を薦めたのも彼女である。
生徒会に籍を置いている

平沢 憂

髪型はいつもポニーテールにしているが、髪を下ろすと外見は唯と瓜二つ

唯の1歳年下の妹。だらけがちな姉の唯とは正反対に、真面目で礼儀正しい性格。
部活はしていない。軽音楽部員ではないものの、折に触れて唯たちの活動をサポートしている。時に底知れない才能の片鱗を見せることがある

家事はほぼ万能。

三浦 和馬

主人公の友達

サッカー部に入っていてかなりの腕
だが頭は可哀想なほど悪いがどんなときでもハイテンションが売り
かなりのオタク

人物紹介（後書き）

主人公の所さえ読んでくれれば話がわかりやすくなると思います

第三話

今は放課後

昨日唯に言われたとおりに待っていた

すると携帯が鳴った

だれだ？

オレは携帯をポケットから取り出した

「唯か…」

メールを開いてみると

今すぐ音楽室まできて!!

と書いてあった

「音楽室ってあの変なクラブの前通っていくのか……」

すこし憂鬱になりながら音楽室に向かった

音楽室前につくと唯が一人で音楽室に向かって百面相をしていた
何やってんだアイツ？

あまりにも一人であたふたしていたため面白く見入ってしまった
すると唯がオレの存在に気づいたのか思いっきり飛び込んできた

「ゆうくん！助けて！！」

いきなり抱きついてきてドキッとしたがすぐ引きはがした

「落ちつけ！どうしたいいきなり？」

唯にいきさつを聞いた

「……で入部するのをやめたいと」

「うん…」

泣きそうな顔で見つめてきたためうかつにもときめいてしまった

……が正直めんどくさかったので

「かえる」

「えー！相談に乗ってくれるいったじゃん！」

「なんかめんどくさそう」

「そんな〜」

と言った瞬間唯の肩が誰かにたたかれた

驚いて後ろを振り向くとそこにはショートカットでカチューシャをしていて薄茶色の髪の子がいた

「うちの部の前で何やってるの？」

唯は驚いていて動けなかった

「あ！もしかしてあなた入部希望者の平沢唯さんじゃない？」

「ギターがすごく上手なんだよね！？来てくれるの待ってたよー！

「！」

唯はなんかもう訳がわからないような感じだった

「じゃあオレはコレで……」

と言って帰ろうとしたが

「どこ行くのかなー入部希望者2さん」

そして無理矢理カチューシャに音楽室に入らされた

「みんな入部希望者が来たぞー!!」

音楽室にはやや吊り目だが美形でつやのある長い黒髪を垂らしているのが特徴的な女子と

眉毛が太くクリーム色の天然パーマの髪をロングヘアにしている女子がいた

「本当か!」

「しかも二人だ!」

「歓迎いたしますわー!!」

アレ……なんかオレも入るみ「部員が四人いないとクラブと認められなくて 一週間以内にあと一人集まらなかったら廃部になるところだったんです」

「本当に入部してくれてありがとう!」

うっ…オレ入る気なんてまったくないのに……そうだ唯はどうするんだ!?

「唯……唯!」

返事がない屍の様だ

くそ!しかたない

「ちょ…ちょっと聞いてくれ!オレらは入る気ないんだ!」

「え……?どうゆうこと?」

「オレはもともと入る気なかったしそこにいる屍は入るのをやめたいと言いに来たんだ!」

「そ…そうなんだ……」

みんながくらい雰囲気なってしまったが仕方ない!

「そうゆうことでオレらは「でもうちの部に入ろうと思ったってことは音楽に興味があるってことよね?」

この野郎!!せっかく帰れるような雰囲気だったのに!!

っと思いながら黒髪を睨むと目線に気づいたのか白くなり動かなくなった

変な奴と思っていたらいつの間にか演奏してくれるみたいな流れになっっていた

「滯！滯！しっかりしろー！」

「ふぁっ！ビ：ビツクリしたー！！」

白くなった黒髪は何とか息を吹き返した

そして各自演奏の準備をしていた

「いくよー1 2 3 4」

流れてきた曲は『翼をください』だった

だがそんなに上手ではなかった

しかしとても楽しそうに弾いていた

演奏も終わりカチューシャが

「えへへ…どうだった？」

「…あんまり上手くないんですねー！！」

ココで天然の伝家の宝刀毒舌を出すとは……

「でもなんか楽しそうな雰囲気は伝わってきました」

「私この部に入部します！」

って入るんかい！！オレの努力返せよ！！

……まあ良い…オレもかえ「ゆうくんも一緒に入ろう！」

「ハイ？」

「だから一緒に入ろう！！」

「……いやムリ」

「えー何で？」

唯はオレの袖を引っ張ってきた

でも

「入んねえって言ってるだろ！！」

大声で叫んでしまった

唯は驚いたのか涙目になって

「ゴ…ゴメンね…」

「あ…いや…こっちこそゴメン…」

まわりの雰囲気がぶち壊しになってしまった

「お…オレもう帰るわ」

オレは一言言い残し音楽室をあとにした

オレは学校からの帰り道昔のことを思い出していた

第三話（後書き）

ちよつと重くなっちゃいました……

第四話

オレは自分の部屋で一人横になっていた

母さんも仕事でいない

「ハア……」

さっきからため息しか出ない

たまに一言

「やっちまったな……」

ずっと一人思い出しては後悔繰り返した

時間も六時三十分

「メシ…作るか」

オレは自分の部屋を出て下に降りていった

なんかねえかな？

そんな思いで冷蔵庫を開けてみると

「……なんもねえ」

冷蔵庫は見事に空だった

「仕方ねえ買い物に行くか」

めんどくさかったが明日の朝食の事も考え靴を履き商店街へ向かった

くくく少し前の音楽室くくく

悠斗がでていった時からみんなずっと黙っていた

「……私と一緒に入ろうって言ったのが悪かったんじゃないのかな？」

唯がボソリとつぶやいた

「そんなわけないだろ！だいたい律がちゃんと確認すればこんなことにならなかったんだぞ！！」

「だってえく……」

「と……とにかく後日にでも謝りにでも行きましょう？」

「そうだな…」

「でもさー何であんなに怒ったんだろ？唯なんか知ってる？」

唯は困ったような顔で

「ゆうくんとは幼なじみなんだけど……ゆうくん中学校の時北海道にいたからなあ……」

「「北海道!？」」「」

「うん！なんかお母さんの仕事の都合でだったはず……」

「それでなんでこっちに戻ってきたんだ？」

「うーん……わかんない……あ！もしかしたら和馬くんなら知ってるかも！」

くグラウンドく

「和馬くん!!」

唯は一人の少年に声をかけた

すると少年はこっちを向きダッシュで駆け寄ってきた

「ゆーいちゅうわー！ーん！！！！何！？俺に会いに来たの！？もしかして告白！？」

唯は笑顔で

「全然違うよ！！」

すると少年はこの世の終わりみたいな顔をして崩れ落ちた

「「さすが天然！」」

律と漣は声をそろえていった

ムギはただ微笑んでいた

「ところで和馬くん、ゆうくんの中学校時代の話って知ってる？」

「悠斗？ああ…前に一度聞いたことあるんだけどそんなに明るい話じゃねえぞ」

「それ詳しく教えてくれる！？」

律が食い入るように聞いた

「えっと…アンタ達って……」

「私は田井中 律！後ろに立ってるのが漣とムギ！」

「よろしく!」

「よろしく」

「よ…よろ…し…く」

漣はまた白くなりかけてた

「ところで悠斗の中学校の時の話だっけ……」

「そう!そのことなんだよ!」

「まあ唯ちゃんはアイツが剣道部だったことは知ってるな!」

「……………そうなの?」

唯は初めて知ったような顔をしていた

「「知らないんかい!!」」

律と漣のダブルツツコミ

「まあまあ」

「まあ話は戻るんだけど……………」

「いつてきまーす」

オレは玄関から飛び出した

「…暑い」

その日は記録的な暑さでセミがよく鳴いていた

これはオレが中学二年の時の夏の話

第四話（後書き）

これから過去の話に行きたいと思います

展開早くてスイマセン……

第五話（前書き）

連続投稿します

第五話

「こんにちわー」

後輩達がオレ達に挨拶をしてくる

「オッス」

オレの隣にいる剣道部部长前田 翔太は律儀に返している

「にしても暑いなあ…」

「まあそう言うなや！夏は良いぜえ〜！だって女子のブラ透けをガハッ！」

「それ以上喋るな」

オレは翔太のみぞおちを的確に射貫いた

「でも本当に暑いな…」

「なんか今年は記録的な猛暑らしいぞ！」

「へー興味ねえ」

「ヒドッ！！そうやってまたわたしを弄ぶのね」

「死んでしまえばいいのに」

「天寿を全うしてやるうー！！」

「ハァー…、次の大会何処と当たるんだっけ？」

めんどくさそうに翔太に聞いた

憎たらしい様な満面の笑顔で

「ん？ 武神館とダヨ！」

「…やっぱ死ぬ」

「なんで!？」

「武神館って言ったら去年の全国の覇者じゃねえかよ！」

「大丈夫！オレらが引き分けでお前が勝てばオレらの勝ちだから！」

「俺に任せる気かよ！」

「だって悠斗はオレらのエースじゃん！」

「ハァー…！」

「どうした悠斗？ ため息ばっかついてると幸せ逃げるぞ！」

「お前の……せいだろ!!！」

オレは持てる力のすべてで翔太を蹴り上げた

「痛ってー！ー！！」

そんなことをしてるというの間にか道場についた

「今日も元気に練習しますか！」

「そうだな」

これでもこの時は楽しかったんだ

……この時は

第六話

大会前日

練習後部長の翔太がみんなを集めた

「オレらは明日去年の全国覇者武神館と戦う！」

今日まで部員には当たる事を言わなかったので初めて知った部員達は驚きの色を隠せなかった

「だが心配するな！オレらには去年の個人戦全道制覇した桜井 悠斗がついている！つまりオレらが負けなかったらこちらが勝つと言う訳だ！」

「確かに！」

「もしかしたら勝てる…」

などと言う声も出てきた

「みんな明日は全力で挑もう！！」

「オオッ！！」

「今日は解散！」

みんな各自帰って行った

「翔太帰るぞー」

「おう！」

オレと翔太も家に帰るために外に出た

「なあ悠斗、明日楽しみだなー！！」

「ああ」

「武神館に勝てばフリーパスで優勝できるからな！」

「そうだな」

「オレ武神館に勝つのが夢だったからな！」

翔太はうれしそうに言った

「まあ明日頑張ろうぜ」

「ああ！！」

十字路にさしかかった

「オレ右だからじゃあな」

「明日な！」

オレと翔太は別れた

「……ハァ…明日か…」

一人つぶやいた

歩いて行くと前からマスクとサングラスをつけバットを持った一人の怪しい男が出てきた

「なんだあいつ？」

そう言った瞬間男が持つてるバットで襲いかかってきた

「うわっ!!」

オレは反射的に腕使って防いだ

「ッ痛!!」

男は第二撃のためにバットを振り上げたが

「遅い！」

オレは男の腹に蹴りを入れた

男は転び慌てて逃げてった

「くっそ…なんだよいった…ッ痛！」

腕に鈍い痛みが走った

「…帰ろう」

オレは家に帰った

大会当日

オレは鈍い痛みとともに起きた

「くそ…昨日より痛てえじゃねえか」

「悠斗メシだぞー」

下から母さんの声が聞こえた

「今行く!」

オレはこれ以上腕が悪化しないように祈りながら下に降りていった

試合会場玄関前

まだ誰も来てなかった

腕は悪くなる一方だ

仕方ねえ今日はでれないって言う「よう!! 悠斗!!」

いきなり翔太が後ろから声をかけてきた

「お…おう」

「今日は楽しみだな」

翔太は屈託のない笑顔で言ってきた

「そ…そうだな」

「どうした? 体調でも悪いのか? もしかして夜寝れなかったとか!」

「いや別に……」

「そっかなら良いんだ! おっ! みんなもきたぞ!」

オレは言えなかった

たった一言の出れないが言えなかった

翔太の夢を壊したくなかった

この時が悲劇を回避する最後のチャンスとも知らずに

第六話（後書き）

次で過去編ラストです

第七話（前書き）

過去編終わりました……

スミマセンでした!!

第七話

「面有り一本ッ！」

審判の声が響いた

「よっしゃー！！！」

「勝ったッー！！！」

オレ達は接戦の末ぎりぎりのところで武神館に勝利した

「やったな！悠斗！！！」

翔太はこれ以上にないくらい喜んでいた

オレも一緒になって喜ぶはずだった

しかしそう言う気分になれなかった

「チッ！あいつらまぐれで勝ったのがわかってねえのか？」

「昨日のじゃ足りなかったようだな」

小さな声が聞こえた

昨日の……もしかしてこいつらが闇討ちの犯「悠斗ー！！行くぞー！！！」

遠くから翔太の声が聞こえた

「お…おうッ！」

まあ深いことを考えるのはやめよう……

オレは先に行った仲間の所へ走った

オレ達はその後順調に試合に勝ち進み見事に優勝した

「カンパ…イ!!！」

「「カンパ…イ!!！」」

オレ達は大会の後打ち上げに焼き肉に行った

「お前人の肉勝手に食うなや!!！」

「うるせえー！油断してるからだ！！っておまえも人の飲み物に
焼き肉のタレ入れるな！！」

「肉の恨み！！」

「オレの領地に入ってくんな！！」

「オレがすべて平定してやる！！」

「すみませ〜ん！ご飯おかわり！」

「オレも！」

「オレも！」

「お前これ以上食うと太るぞ！！」

「うるせッ！！」

オレ達は打ち上げを楽しんでいた

「フー…」

オレは店の外に出て夜風に当たった

「疲れたか？」

翔太が後ろにいた

「まあちよつとね……」

「……腕どうかしたのか？」

「……気づいてたんだ」

「オレとお前の仲じゃないか!!」

「……下僕と主人？」

「ダレが下僕だ!! そうじゃなくてお前腕かばってたろ？」

「ちよつとな……」

「あんまムリするなよ」

「ハイハイ」

「おーい! 悠斗、翔太一発芸大会すんぞ!!」

「今行く!!」

「行くぞ! 悠斗!」

「へいへい」

オレと翔太は店のへ入っていった

「疲れた」

打ち上げも終わりオレは家に帰って部屋で横になった

携帯が鳴った

「翔太からか」

どうでも良い内容だろうと思い無視をして眠りに落ちてしまった

次の日携帯の着信音で起きた

携帯を見て

「ダレだ？」

見たことのない番号だった

いつもなら無視するが今日はなぜかでなければいけないと思った

電話に出た

「もしもし？ 東警察署の者ですが、桜井 悠斗さんですか？」

翔太の声とは全く違う男の声が聞こえた

「ハイ……」

「今から最寄りの交番に来ていただいても良いですか？」

「わ…わかりました」

オレはとてつもなくいやな予感がしたのですぐに支度をして交番へ走った

交番に着いたらスーツ姿の男が数人いた

「桜井 悠斗さんですね……」

「……ハイ」

「少しお話を伺いたいのので署までご同行お願いできますか？」

「な…何ですか!？」

「ついてくればわかります」

「……ハイ」

オレはパトカーに乗せられ警察署につれて行かれた

オレは取調室に連れてこられた

「いったいどうしたんですか!？」

「ご学友の前田 翔太さんが遺体で発見されました」

オレは息が詰まった

頭の中が混乱した

真っ白になった

「な…なんで…」

オレは何とか声を出した

「路地裏で倒れている所を発見されました…」

「そんな…翔太が…」

息ができなくなり椅子から崩れ落ちた

「大丈夫ですか！？おい医者連れてこい！！」

オレはそのまま気を失った

起きたら救護室のベットの上だった

「大丈夫ですか？」

「オレは一体…」

「取り調べ室で倒れてここに運ばれてきました」

だんだん頭が覚醒してきた

それと同時に翔太が死んだという記憶も思い出してきた

「翔太は…翔太はどうして死んだんですか!？」

オレは医者 of 肩を揺すった

「お…落ち着いてください!!!とにかく今日はもう遅いので後日に取り調べするとのことです!!!」

外を見てみるとあたりがオレンジ色に照らされていた

「車で送らせるのでちょっと待っててください」

オレは頭の中がぐちゃぐちゃになった

いつの間にか車に乗っていた

「何でだよ……」

オレは声にならないような声でつぶやいた

車の窓から見えた夕日が痛いほど悲しく見えた

第七話（後書き）

次こそ過去編ラストです

第八話（前書き）

感想待ってます！！

第八話

次の日オレはまた警察に呼び出され取調室にいた

「昨日はすみませんでした…」

「いえいえ、ところでわざわざ警察に呼んだ訳をいってませんでしたよね」

「……ハイ」

「翔太さんが死亡したと思われる時間のすこし前にアナタの携帯電話への発信履歴があったんですよ、それで何か心当たりとかは……」

「……死因は…なんだったんですか？」

「えっとー……転倒による頭部挫傷です」

「……………」

刑事に聞きたいことはたくさんあった

だけどこれ以上は何も聞けなかった

何も話せなかった

何も考えられなかった

何も考えられなかった

でもこれだけは聞きたかった

「……犯人はダレですか……?」

刑事は言いづらそうに

「残念ながらまだ……しかし不自然な外傷があり事件の可能性があるので……」

「では話を戻して……」

「今日はありがとうございました」

事情聴取は午後五時頃に終わった

「車で送って行きますか?」

「いや……いいです」

オレは警察署をあとにした

路地裏にさしかかった

翔太が死んでいた場所だ

花束がいくつも供えてあった

オレはただ立ち尽くしていた

すると武神館のジャージを着た二人の男が横切った

「ここで人死んだんだろ!？」

「なんか噂だと先輩達関係あるとか言ってた?」

「マジで!？」

オレは考えるよりも先に行動していた

一人の男の胸ぐらをつかみ

「今…何て言った?」

「は…ハイ!？」

「今なんて言った!？」

話を聞くと武神館の剣道部の三年がここでケンカしたらしい

オレはそれを聞いた瞬間走って家に帰った

家につき木刀を持って飛び出た

向かった先はいつも武神館の奴らが集まるコンビニだった

「デメエら二日前のこと知ってるか？」

オレはコンビニの前にたむろっている武神館の奴らに声をかけた

「おっ桜井だ!!」

相手は驚いていたがそんなことどうでも良かった

「だからしらねえのか？」

「しらな―イ！」

「うわっはっは!!」

相手はふざけていた

「もういい…喋るな」

オレは木刀を振り上げた

ケンカは強い方だと思ってた

思ってたというのは、本気でやったことがないからだ

「やめてくれ!! 助けてくれ!!」

「オレじゃない! おれらのせいじゃないんだ!!」

「……ダレがやった?」

「部長がやったんだ!! オレらは何もやってない!!」

「でも見捨てたな……テメェらも同罪だ……オレと同じでな……」

オレはそのあと部長の居場所を聞いた

「ゲームセンターか……」

オレは走った

「なんだテメェ!？」

「いいから外に出ろ」

オレはゲームセンターにいた部長を捕まえ外に引きずり出した

「お前は桜井じゃねえか!!！」

「だからどうした」

「もしかして敵討ちか？」

「そんなきれいなモンじゃねえよ」

敵討ちではなかった

ただアイツの死んだ訳を知りたかったただけだ

「なんでアイツを狙った」

「オレらだっていつを狙ったわけじゃねえよ、ただ桜井に連絡する
ようにお願いしたのにやだとか言い出すからついカッとなってな」

「オレを護るためにアイツは死んだのか……………」

オレはもう何が何だかわからなくなった

いや元からわかってなかったかもしれない

ただ振り下ろした木刀の感触が心地よかった

そのあと誰かが連絡したであろう警察につかまった

しかしすぐに家に帰された

次の日はいつも通り学校へ行った

学校では生徒指導室によばれた

部活は……退部となった

友達は……近寄らなくなった

武神館は悪で有名だったため

それを倒したオレは目をつけられるようになった

それからケンカばかりの毎日だった

一年後オレは母親の都合で引っ越すことになった

第八話（後書き）

グダグダになっちゃいました……

感想を待ってます!!

第九話

「それからオレと悠斗が会ったんだ……ってどうしたの!？」

話を聞いていた軽音部全員が号泣していた

「ううっ…ゆうくんにそんな過去が……」

「悠斗もつらかったんだな……」

「悠斗もあつた時はトゲトゲしい奴だったんだ……でもね……唯ちやんと会ってアイツ笑うようになったんだ」

「唯……なんかしたのか？」

「えッ！わたしなんにもしてないよ!!」

「じゃあオレ部活に戻るから」

「ありがとう!!」

「私たちも帰るか」

「そうだな」

「じゃあ音楽室に荷物取りに行くか」

荷物を取りに部室に行き

各自帰って行った

「ゆうくんにひどいことしちゃったかな……」

ずっと後悔していた

気づくと自分の家の前についていた

「そう言えば今日憂いなんだよなあ」

そう思い鞆から鍵を取り出そうとしたけど……

「……アレ？」

……なかった

「ど……どうしょ……鍵がない！」

「……なにやってんの？」

買い物からの帰り道

家の前であたふたしている唯を見つけたので声をかけた

「ゆっゆうくん!!」

「あー……もしかして鍵忘れたとか？」

「ゆうくんって……超能力者？」

「全然違うんで帰らせていただきます」

「助けて! ゆう「自分の力でどうにかしなさい」

「即答!」?

ここでとても大きなため息をひとつ

「憂は？」

「友達と勉強するからおそくなるって言っていました!」

「飯は？」

「食べてません!」

「お金は？」

「ないです!」

「どんまい、じゃあかえるわ」

「助けてくれないの!」?

唯は捨てられた子猫のような上目遣いで見てきた

「わかった！わかったからその目で見ろな！」

「本当！？」

「夜飯ぐらいは食わしてやるよ」

「ありがとー！！」

唯が思いっきり抱きついてきた

「わかったから離れろ」

なんとか唯を引っぺがしオレの家に入ってしまった

「おいしかったー！」

唯はオレの作った野菜炒めをリスみたいにパクパク食べ
あつという間になくなった

「で…憂はいつ帰って来るんだ？」

「えっ今日帰ってこないよ」

「……さあどこから突っ込んでほしい？」

指の鳴る間接すべてをならして笑顔で訪ね
唯を床の上に正座させた

「いやゝ憂が友達と勉強会兼お泊まり会を……」

「それで？」

「それで今日は一人寂しくノ予定が……」

「鍵忘れたと…」

「泊めてください」

「いや道徳的な面でムリ」

「ええっ!!」

「お前の保護者の和は？」

「いやゆうくんちがいい!!」

オレはそれを聞いた瞬間

電話を手持っていた

「もしもし和か？」

「そうそう唯のことで」

「正解です」

「えっなんで？」

「道徳的にいかんだろ」

「まっ…まっって」

※内容をご想像にお任せします

電話を一方的にきられた

「…………風呂入ってきなさい」

「じゃあ泊まってイイの？」

本日二回目のもとても大きなため息

「…………いいぞ」

「やった〜!ありがとう〜!!!」

そして本日二回目の抱きつき

「ふくは……」

「ブルマならあるよ!」

「唯……人はそれを萌えと呼ぶ……ってか何で持ってたの!？」

その後パジャマは母さんのを貸し
寝る部屋も母さんの部屋を貸した

唯が風呂を入り終えてオレも入り自分のベットでくつろいでいた

「ゆーくん!」

「なんだ？」

ドアの所から声が聞こえたので見てみたが人影はなかった

「おっかしいな……」

「なにが？」

唯はすでにオレの隣でごろごろしていた

「Σ（。Д。；）お前前世忍者!？」

「なんかかっこいい!」

「かっこいいか? ところでなんの用?」

唯は言いずらそう中顔をして

「……ゆうくんの中学校の時の話なんだけとさ……」

「和馬から聞いたんだ……」

特に驚きはしなかった

家の前で慌てていた時には何となくだけど感じていた

「あの…その…ごめん」

「別にいいんだ…コレでわかっただろ、この部屋使っていいいからもう寝ろ」

もういいんだ……

巻き込んだらだめだ……

こいつを……

友達を――

「あともう……オレに関わるな」

もう嫌なんだ……

オレが笑うと翔太が泣く

オレが友達といると翔太が独りになる

オレが幸せになると翔太が不幸になる

そんな気がするだから

……もう嫌なんだ

「イヤだよ!」

「は!？」

「なんで!？ ゆうくん悪い人じゃないよ!」

「だからオレは! アイツを殺したようなモンだ!……オレが幸せになる権利なんてないんだ……」

オレが殺した――

「そんなことないよ! ゆうくんはそんな悪い人じゃない! 翔太君だってそんなことを思っていないよ! みんなゆうくんを心配したり和馬君は私たちにゆうくんの事話してくれたり……」

唯は泣いていた

目に大粒の涙をためて必死にこらえようとしていた

「みんなゆうくんが心配で…」

唯の涙が頬を伝わった

「私もゆうくんが心配なんだよ……だからもうそんな悲しいこと言わないで……」

オレは唯を抱きしめた

唯の泣いている顔を見ていたくなかったから
オレの泣いてる顔を見られたくなかったから

「唯ゴメンな……本当にゴメン」

「うっぐ…ひっぐ……」

オレは後悔した——

今までとは違う後悔を

やっと理解した——

翔太の死を悔やむのではなく

翔太の分まで笑って生きて行かなきゃいけないことを

「唯？」

泣き声は消えていた

その代わりに安らかな寝息が聞こえた

オレは思わず笑ってしまった

「いろいろ忙しい奴だな……でも……ありがとう」

オレはそのまま唯を部屋に寝かせて
リビングで一夜を過ごした

次の日の朝早く何者かが家に入ってきた

「久々に息子の寝込みでも襲うか」

静かに悠斗の部屋に入った

布団をふかくかぶって顔は見えなかったが確かに人がそこにいる

「うっしっし……よく寝てる」

あやしく目を光らせ布団に飛び込んだ

「それー！ー！」

くすぐっていくと何か柔らかい物の感触がした

「アレ……なんだろう？」

何回も揉んだ

そこである疑惑が出てきた

「コレもしかして……おっ「キャー！ー！ー！」」

朝の静かな喧噪が一気に消え去った
オレはソファーから飛び起きて自分の部屋
つまり唯が寝てる部屋に走った

「どうした！？…ってなにこのカオスな展開……」

そこには唯を襲ってる自分の母がいた

「息子が女に…娘になってるー！！」

「ゆうくんが違う人になってるー！！」

オレは母を正座させ即説教をした

唯は隣で睡眠の第二ラウンドに入っていた

その後飯を作り

なんとか唯をたたき起こし

母に罰としてトイレ掃除を任命し

学校に登校した

「ところでゆうくん軽音部に入るんだよね！」

「えっ！…そうってんの？」

「ダメ…かな？」

唯は捨てられた子猫のような上目遣いで見てきた

「それお前の必殺技？」

「えっ？なんのこと？」

「わかった……いいよ」

「本当！？やったー！！」

「だから抱きつくな！」

また抱きついてきた唯を引っぺがそうしていると

「なあーに朝からラヴラヴしてんのかな？」

「コッ：コラ律！」

後ろに昨日の二人がいた

「あっ！りっちゃん！濡ちゃん！」

「黒髪とカチューシャか」

「ちがうよ！律ちゃんと濡ちゃんだよ！ホラちゃんとあやまんなよ！」

「……ごめんなさい」

「イヤ元々律が悪いん「分かればいい！」

「律っー！！」

「……ふっ……ふふっ……ふふふっ！」

唯は濡と律の漫才に耐えきれず笑い出しそれにつられ

「ふふふ……はははは！」

「はははっ！」

みんなで笑い出した

笑いナミダで視界が揺れた

そこに人影が見えた

笑っている翔太だった

オレは決めたこいつらと歩いて行く

そのときの心はとてもすがすがしく透き通っていた

第九話（後書き）

過去編やっとなりました

ってか最後ムギ出すのを忘れてたって言うか
出せなかったって言うか……

次からは原作&アニメと同じように進みます

感想待ってます

第十話

「じゃあ悠斗さんも入部してくれるんですね」

「そうだよ」

「一応な」

「これで五人だな」

「部費もたんまり……」

「律！」

ここで濤のチョップが一発

「あうっ！」

みんなでゆっくり音楽室でお茶をしていた

「ところで楽器はってどうすんだ？」

「ああそういえば悠斗の楽器と唯のギターはどうするの？」

「オレはギターしかできん」

はいココでみんな驚き

「悠斗ってギター弾けたのか！」

「一応」

「初めて知った！」

「おまえ本当に幼なじみか？」

律があきれ顔で言った

「いつからやってるんだ？」

「小学校五年ぐらいの時に母さんが通販で買った奴をね…」

「へー…じゃあ悠斗の家の母さんも音楽やってるんだ」

「いや音楽が趣味って言うより通販が趣味って奴で…まあギターも被害者の一つなんだ…」

そのせいで家にはぶら下がりの健康器からバランスボール、さらにアウトドア用品一式等何でもある

「唯のギターは？」

「ん？ギター？…あーそっか、私ギターやるんだっただけ！」

「…軽音部は喫茶店じゃないぞ？」

「でもお茶しか飲んでねえじゃん」って思ったけど言ったらダメなんだろうな」

「ギターってどれくらいするの？値段」

「うーん…安いのは一万円台からあるけどあんまり安すぎても良くないから、最低でも三万円くらいのがいいかも…」

「三万円！？…私のお小遣いの半年分…」

「高い物は十万円するのもあるよ？」

「…部費で落ちませんか？」

唯は現実から逃げた

それを優しく捕まえるように律が

「落ちません♪」

唯撃沈

「…このお菓子おいしいわよ」

ムギ救いの手

唯回復

「よぉーし！今度の休みギター見に行こうぜ！」

「オレ……も？」

「もちろん！」

「オーっ！」

みんなで行くことが決定していた

よし！次の休みは風邪だな！

俺は一人次の休みの予定を立てていた

帰り道と馬と一緒に帰っていた

携帯が鳴りメールが届いた

見たことのないアドレスだった

スパムか？

開いてみると

風邪引いてもでも行くからな！

B y部長

こいつ気づいてやがったか……
てかなんでオレのアドレスを知っている!?

とりあえず和馬を横目で見た
なんかむかつく顔で微笑んでた
こいつか…

「おまえかオレのメアド教えたの?」

「そんな…親友の個人情報勝手に教えるような奴に見えるかい!」
「?」

「みえないな…そう言えばお前カチューシャのメアド知ってるか?」

「律ちゃんだね!もちろん知ってるよ!」

「……何で知っている?」

「そりゃあ悠斗のメアド教えるかわりにね!」

「ほう…そうか…オレのアドレスを売ったか…」

「あゝイヤゝその…軽音部の人なら良いかなって」

「別に教えたことに怒ってないんだよ…ただオレがお前にダシにされた事が気に入らん…よってここに制裁を加えよう」

「カッ…顔はダメー!」

その後存分に和馬に殴る蹴る等の暴行を加えた

第十一話

「ねむい、だるい、かったるい」

「まあおちつけ」

今日は唯の楽器を見る日

そして今は約束の時間！

……を過ぎた時間

「遅い！」

「まあそう言うなって…でも悠斗もメールしなかったら来る気なかつたじゃん」

オレは朝行く気がなくて二度寝に入ろうとした時
携帯の着信音が鳴った

軽くって言うか殺意しかわかなかつたが一応出た

「もしもし？」

「悠斗！起きてるか？ちゃんと来いよ！」

「その声はカチューシャか…」

「カチューシャじゃなくて田井中律！」

「あーはいはい…田中さんね」

「わざとかソレ？」

「ところでなんの用？」

「だから今日ちゃんと来いよ！」

「覚えてたらな」

「覚えてたらって来る気0か！？」

「お前オレのやる気なめんなよ」

「じゃあ来るのか！」

「お前：ソレはソレ、コレはコレだ」

「まあとりあえずもう悠斗の家のリビングにいるから」

「ハイ？」

オレは急いで下に降りてった

そこには母さんと恥ずかしがつてる黒髪と田中がいた

「なんでいるの？」

「迎えに行かなきゃ絶対来ないと思ってさ！」

「何で家知ってるの？」

「和馬から聞いた！」

「なんで黒髪は固まっているの？」

「いやー滯は恥ずかしがり屋だからさ」

「何で母さんとそんな楽しそうに話してるの？」

「いやーなんかウマがあったっていうか…」

「オケーオケー…だいたい分かった。つまりオレは行かなきゃならないと言うわけだな？」

「正解！って言うわけで行くぞーっ！」

そんなわけだ

「オレ迎えに来たついでに唯も迎えに行けば良かったじゃん」

「唯の家って近くなのか？」

「ウチの隣」

「へへへ」

そんな世間話をしていると唯が見えてきた

「あっ唯っっ！こっちこっち！」

「あっみんな〜！」

唯が走ってきた

が人にぶつかったり犬とじゃれ合ったり

（（（後数メートルがたどり着けない！？）））

全員の思考がシンクロした気がした

やっと全員が集まり楽器屋に向かった

「お金は大丈夫だった？」

「お母さんに無理言って五万円前借りさせてもらった！だからこれからは計画的に使わなきゃ！」

和……お前の教育で唯が成長してくれたぞ

オレは軽く心の中で感動した

「いけないんだけどね……」

唯は服屋に流れるように入っていこうとした

「こちら」

それを押さえようと律が唯の首根っこを捕まえた

「ちょっとみるだけ！」

それをも振り切り入っていった

その後はもう好き放題に休日のショッピングを楽しんでいた

ゴメン……前言撤回なんも変わってない

さすがに女性用の物ばかり置いてある店には入れなかったのので外で待っていた

今考えるとよくキレイなかったオレ!

買い物も一段落つき喫茶店に入っていた

「あー疲れた〜」

「えへっ! 買っちゃった!」

「楽しかったですね」

「いや多分オレが一番疲れた……」

「男だろ? 気にすんなって」

「次何処行こっか? ……ってアレ……なんか忘れてない?」

するといきなり滯が

「楽器だッ! 楽器!」

「おーしまった!」

これからさらに楽器屋かよ…

気分がブルーになった

「バイトをする!?」

オレは音楽屋には行かずに本屋で立ち読みしてた

そこで戻ってきた唯達に話を聞いた

「何でまた？」

「唯のほしがっているギターが高くてさ」

「値切ってもか？」

「いやまだ交渉はしてないんだけど……」

「交渉はオレの巧みな知恵と話術で「二十五万を五万円にすることができぬのか？」

「ファーストフード店かそれともコンビニか？」

「値切れないんだ……」

「分かったよちゃんとバイトするから……でもその前に田中ちょっと来い」

「田中じゃない！田井中！」

「分かった田井中でも田中でも中田でも何でも良いからちょっと来い」

「ぶうー」

少しあの三人から離れた所で

「大丈夫なのか？あの二人をを雇ってくれる所なんてそうないぞ！」

一人は超天然

もう一人は超恥ずかしがり屋

「まあ何とかなるんじゃない？」

「大丈夫か？」

「明日考えればいいじゃん！」

もう帰りたかったのでとりあえずそれ以上は何も言わなかったがとても心配だった

第十一話（後書き）

ムギの話し方がよくわかんないです

感想を待ってます！

第十二話（前書き）

更新遅くなりました

第十二話

「空が：青いな」

「現実逃避するなよ」

オレ達は唯のギターのためにみんなでバイトをしている
隣にいるのは唯と律

ちなみにバイト二日目

※ちなみに作者の文才がなくて1日目のアイディアがなくて書けな
かった訳です

「疲れたあゝ」

「眠い」

「愚痴るなって」

バイトの内容は交通量調査

つまり外でずっと座って道路を見てるだけ

そのせいで眠気と精神的疲労感に板挟みであった

「そう言えばさー悠斗と唯ってどんな関係なの？」

「どうもこうもただの幼なじみ」

「親同士が仲が良いんだよねゝ」

「へーそっか」

なぜか律の顔がほころんだ

不思議に思ったが眠気との戦いが激しくなりそれどころではなかった

「二日間お疲れ様」

バイト先のおばさんの一声で二日間のバイトが終わった

「一日八千円か」

「お母さんに前借りした五万円を合わせてもまだ足りないわね」

だが唯の顔は少し曇っている気がした

「あと何回かバイトするか」

「そうですね」

「うーしじゃあまた探そっか」

すると唯は何か決めたような顔で

「やっぱりこれいいよ」

「「「え？」」」

「バイト代はみんな自分のために使って」

「唯ちゃん…」

「私自分で買えるギターを買う」

「唯…」

「一日でも早くでも早く練習してみんなと一緒に演奏したいもん！
また楽器屋さんに付き合ってもらっても良い？」

「「「うん！」」」

唯は満足そうな顔をして

「みんなありがとう！じゃあ帰るね」

「うん」

「また明日」

「じゃあね」

唯は帰って行った

しかしギターを持ってる想像でもしたのか恥ずかしい人になっていた

「……ところで律一つ聞きたいことがあるんだけど」

「なに？」

「悠斗って起こさないの？」

オレは一人横で眠気との熱戦の末惜敗

||爆睡していた

次の日前に行った楽器屋に行った

※ちなみに今度はオレもちゃんとしてった

店の中へ進んでいくと唯がほしがってたというギターの前を通りかかった

唯は止まって物欲しそうな目で見ていた

それに気づいたのか滯は

「よっぽど欲しいんだな」

「うっしゃ！またバイトを…」

するとムギは何かいいことを思いついた顔で

「ちょっと待ってて」

レジの方へと消えてった

オレはギターにみいつてる唯をほっとき滯と律をよんだ

「アイツは何かやってくれるはずだ！」

「どうした？いきなり？」

「たぶん値切りに行っただと思っ！」

「そんな二十五万を値切るなんてムリだろ」

するとムギが帰ってきた

「このギター五万円で売ってくれるっ♪」

「「「(OΔO)!!!」」」」

「まじで！」

「何！？何やったの！？」

やっぱりやってくれた

「何で悠斗はわかったの！？」

「だってさっき『KOTOBUKI corporation』って書いてあったからそうなのかなって…」

「このお店実はウチの系列のお店で」

ああ初めてこんなブルジョア発言きいたかも

「ムギちゃん！ありがとう！残りはちゃんと返すから」

よしコレで一件落着！

帰ってさっさと寝よう

オレは帰り道そう思いながら帰った

…そうしかっただけだな

その夜唯からいろいろな

角度からとったギターの写メや自分のサインを延々と送り続けてきた

腹いせにそれを全て和馬にリアルタイムで転送しておいた

第十二話（後書き）

ちなみにまだ悠斗は唯以外名前で読んでません
名字かあだ名です

感想待ってます！

第十三話（前書き）

アンプの所は飛ばしました！

第十三話

「じゃーん！」

「「「おおーっ」「」」」

唯が買ったばかりのギターを持ってポーズをとっていた

「ギターを持つとそれらしく見えるね」

「馬子にも衣装だな」

「ねえなんか弾いてみてよ！」

チャラリーララー

「チャルメラやないかい！」

あっオレ久々に突っ込んだ！

「ハイハイどうでも良いからね」

「アレ：この頃扱い方の低下を感じる」

そんな律とオレのやりとりを無視して漕が

「唯 家でギター練習してないの？」

「家じゃほったらかしなんじゃないの？」

「「そんなことない！！（よー！！）」」

ついこの前の精神的攻撃を思い出して叫んでしまった

「なんで悠斗が叫ぶんだ？」

「オレの携帯をってみろ」
「なにになに？」

オレはこの前唯から来たメールを全部見せた

「これは…」
「ひどいって言うか…」
「むしろ迷惑メール？」

ムギ・滯・律の順番でメールの感想をいった

「違うよー！すごい大事にしてるんだよ？ホコリがついたらふいたり、鏡の前でポーズとってみたり添い寝してみたり写真撮ってみたり…ボーツと眺めてて一日が終わっちゃうなんてこともしょっちゅう…」

「弾けよ」

「人を巻き込むなよ」

「いやーどうしても誰かに言いたくて…しかもギターってきらきらぴかぴかしてるから……なんか触るのが怖くて…」

「ああ！わかるわかる」

オレは唯のギターを見てみた

「ギターのフィルムって外さないの？」

「……唯って携帯のモニタのフィルムもはがしてないんじゃないの？」

「すごい！！なんでわかったの！？」

その時オレは一つの気配を感じた
律だ

いかにも

コレはがしたい！思い切りびりっと！でもやっていいのかな？さすがに人の物だし…

でもはがしたいッ！

みたいなことを考えている顔をしていた

：絶対こいつかさぶたできたらすぐはがそうとするタイプだな
そんなことを考えていたらついに律が動いた

「えーっ！っ！！」

ビリーッ！

音を立ててギターのフィルムをはがした

「「ああーっ！？」」

その瞬間空気が止まった

やっちゃまったよコイツ…

唯が今にも泣き出しそうなぐらい目に涙をためていた

「律ッ！あやまれ！」

「ごめんっ！ほんの出来心だったんだ！！」

オレは救いの手をさしのべた

「誰か唯に菓子を食べさせろ…そうすれば機嫌が直る！」

律はすぐに動いた

「ほーら！！ムギが持ってきたお菓子だぞー！！」

「そんな訳で機嫌がなおるわけ…」

モグモグ…

「なおったー！？」

「これで一安心…」

「そうだよね…やっぱりギターって弾くモノだよね…。ただ大事にしているだけじゃギターもかわいそうだよね」

唯の機嫌がなおりだんだん元気になってきた

「ありがとうりっちゃん！私やる気出てきたよ！」

「お？…おお…そ…そうか？うん！唯がギター練習するきっかけになると思ったんだ！さすがわた…うっ！！」

滯のきつい一撃

「調子にのるな」

律瀕死のダメージ

そんな律を唯は無視して

「それにしても…このお菓子すっごくおいしいよ！ムギちゃん、こんな高そうなお菓子いつも貰っちゃっていいのかな？」

「いいのよ、いつもいろんな方からいただくけど…家に置いといても余らせてしまうからみんなに食べて貰った方が良さの」

ああ…やっぱりブルジョワだ

唯も今の発言に驚いていた

「でもギターの弦って怖いよね。細くて硬いから指切っちゃいそう」

律が良いことを思いついた様な顔をした

「そうだぜ！気をつけないと指がスパーツと切れて血がドバーツと…「キヤーーッ！！」」

叫び声が聞こえた
唯じゃなかった

「…なんで滯が悲鳴を…」

「い…痛い話はダメなんだ…」

その一言にオレのS心に火をつけた

「アマゾンにいる『カンジルー』って言う魚は尿道から体に入ってきて体の中を食い荒らすんだって」
「キヤーー！！」

楽しッ！！

「おっほんっ！ギター練習しているうちに指先が硬くなるから血が出ることはないよ」

必死に貞操を取り繕っていた

「ほら」

「わ！本当だ」

唯はぷにぷに触りまくった

「あの…唯？」

「も…もうちょっとだけ」

このままでは止まらないと思ってなんとか空気を変えようと

「唯ってどのコード弾けるの？」

「一体何から初めていいやらわかんないから何もできないんだ」

「とりあえず最初はコードを覚えると良いよ」

「わ！ありがとう」

唯は濡から渡された教本を開いた

「ま…まずは楽譜の読み方から教えてください」

「そこから！？」

「とりあえずアレだな…悠斗！あとは任せた！」

「ハイ！？」

「おねげえします！」

「……ハイ」

こうしてオレは唯の先生となった

そう言えばもうちょいでテストじゃん

勉強しないといけないのか…
メンドくさ

第十三話（後書き）

次はテスト編です！

感想待ってます！！

第十四話（前書き）

すっごいグダグダです

ちなみにテスト編です

第十四話

「うーんっ…やっとテスト終わったぜーっ!!」

律が言ったとおり中間テストが終わった

「高校になって急に難しくなって大変だったわ」

「そうだな…そして…もっと大変そうな奴がここに…」

唯の方を向くと独り答案用紙を持ってブルーになっていた
澪はおそろおそろ聞いた

「そ…そんなにテスト悪かったのか？」

唯は自虐的な笑みをこぼして

「クラスで一人追試だそうです…」

（（（うわぁ……）））

全員が本気で唯を哀れんだ

「大丈夫よ!今回は勉強の方法が悪かっただけじゃない?」

「そうそう!ちょっと頑張れば追試なんて余裕余裕!」

「学力ごときで人の価値は計れないってマンガで言ってたし!」

「勉強は全くしてなかったけど…」

「励ましの言葉返せコノヤロー」

唯も負けじと

「そういうりっちゃんはどうだったのさ！」
「ん？ あたし？」

律はこれ見よがしに89点の答案用紙を出しながら

「余裕ですよ！この通り！！」

唯はそれを見ながら

「……こんなのりっちゃんのキャラじゃないよ……」

「何だと！どういう意味だ！」

「そのまんまの意味だと……」

律は高笑いしながら

「私くらいの人間になると何でもそつなくこなしちゃうのよ！」

「りっちゃんは私の仲間だって信じてたのに……」

すると漐は意地悪な笑みを浮かべながら

「……テスト前日に勉強わからないって私に泣きついてきたのは何処の誰だっけ？」

「あっ！？ バラすなよ！！」

「それでこそりっちゃんだよ！！」

「赤点取ったやつに言われたくねえー！！」

「結局同じレベルじゃん」

「うるさい！ だったら悠斗は何点なんだよ！」

オレは鞆から答案用紙を出して律に渡した

「どれどれ……92点だと!!」

「オレの学力なめんなよ」

「悠斗って頭良かったんだな」

「初めて知りました」

「凄いでしょ!」

「赤点取ったお前が威張るな」

一時期ケンカに明け暮れてる時もあったが
昔から勉強はできる方だった

「とりあえず追試で合格点取るまで部活動は禁止だって…」

「え?そ…したら部室いるのまずいんじゃない?」

「大丈夫だよお菓子に食べに来てるだけし」

「そっかそれなら安心だね!……なんでやねん」

律は唯の背後に回りチョークスリーパーをかけた

高度なノリツツコミだな……まあどうでも良いけど

唯は何とか抜け出し濡の元へ駆け寄った

「…というわけで濡ちゃん助けてー」

「え……私?」

「…仕方ないな…それじゃあ今日勉強会するか!」

「本当!」

「うまいんだぜ?濡は…一夜漬け術教えるのが!!」

「うおーい!!印象悪いな!!フツーに教えるよ!」

じゃあそろそろ手を打つとくか

「じゃあ頑張れ！オレはいつもお前を応援してる！」

「ゆうくん…わかったガンバ「悠斗も来るよな？」

「行かなきゃダメ？」

「当たり前！」

遅かったか…

唯の家の前についた

「本当に悠斗の家の隣なんだな」

「そうだよ、だから小さい頃よく遊んだもん！」

「遊んだっていうか唯がついてきただけだろ？」

「まあとりあえず入ろうぜ♪」

律の提案にのり唯を先頭に家の中へ入ってた
すると中から髪をあげた様な唯が出てきた

「お姉ちゃんおかえり…アレ？お友達？はじめまして妹の憂で
す。姉がお世話になってます。あっ！スリッパをどうぞ」

憂は人数分のスリッパを並べた

（（出来た子だー！！））

また場所は変わってここは唯の部屋

「……いやー：姉妹でこうも違うもんかね？」

「何が？」

「妹さんに良い所全部吸い取られたんじゃないの？」

「ひどーい!!」

唯と律がじゃれ合っていると憂が入ってきた

「みなさんよかったらお茶どうぞ。買い置きのお菓子で申し訳ないんですけど……」

（（（本当に出来た子だー!!）））

……………でそこを展開して」

オレと田中以外は勉強中……どうすっかな？

オレはあくびをしながら考えていた。

「だから田井中だって……もう突っ込むのイヤになってきた」
「ならいいじゃん……あっメール来た」

ケータイが鳴った。開いて内容を見ると、

『h l u p! h l u p m e!! b y和馬』

と書いてあった。

深いため息をついて

「書けないなら日本語で書け」

「えっなに? なに?」

中田は興味深そうな顔で寄ってきた。

オレはケータイを渡して画面を見るように促した。

「何て書きたいんだ…?」

「しらねえし興味もないしやる気もない。アッやばっ! 三拍子そろった」

カチューシャはケータイを見ながら

「どうしたの? コイツ?」

「こいつもテスト赤点って良いってたような言っただけだったような……」

「仲良いんじゃないのかよ!」

オレは胸を張りながら

「いや特に!」

デコはあきれながら

「友達なくすぞ…っていうかなんかさつきから扱いがひどい気がしてたまらない！」

ちよつといじけながら抗議してきた

「あっメール来た！なにになに…『もうお前の家の前に来ている！』だつてさ」

ケータイを奪い取り

「人のメール見るな…ったく」

窓から自分の家を見た。本当にいやがった。
大きなため息を一つして

「オレちよつと帰るわ」

「私もついてく！」

元気にバカヤローが手を挙げて言い出した。
オレはだるさと気だるさを込めた目でバカヤローを見つめ

「まあ…コレはアレだな…バカヤロー」

「なっ！せっかく男だけになるだろう部屋に一輪の花をと思つての好意なのに！」

オレはもうダメだという目で秋山に助けを求めた

「いいんじゃないか別に？」

「お前もか！」

オレは予想外の裏切りに驚いた。
その後に秋山は一言続けた

「これで邪魔する人はいなくなった!」

押しつけやがったなコノヤロウ:

オレはイライラを募らせながら

「オレの家来ても面白いモンないぞ」

「あっ! 良いんだそう言うのは」

オレはバカヤローのデコをつかみ

「じゃあオレの家で何がしたいんだ?」

「いやーアレックスよ! このままここにいても邪魔になるというみんなの被害を考えて:」

「じゃあオレに対する被害はどうなるんだよ?」

「ここは誰かが犠牲に: あっケータイ鳴ってますよー」

オレはデコを離してケータイを取り出し電話に出た

思いつき不機嫌そうな声で

「何だよ?」

「今どこだよ! ずっとまってんだよ! そろそろ疲れてきたんだよ!」

「いきなりだけどお前天才になるための唯一の方法知ってるか?」

「お: 教えてください!」

「オレもしらねえ」

「しらねえのかよ! ちょっと期待しちゃったじゃねえか!」

「もしかしてそれが天才になるための試練だったり…」

「マジッスか！あと三日は待ってやる！いや待ってみせる！！」

オレはまだ何か言っている和馬を無視してケータイをきった。

あんな奴が家の前にいたら近所からの評判が落ちると思う

「めんどくさい事限りねえけど行くか…」

そんなオレの決心を邪魔するように

「よし！じゃあ行こうー！」

「本当に来るのか？」

ため息をつきながら聞いた

すると威張るように

「もちろんだ！」

第十五話（前書き）

更新遅くなってスイマセン！

第十五話

特に面白くもない部屋。まあゲームとかマンガとパソコンはある。

そこでオレは寝たりくつろいだり勉強したりしている。

まあつまりオレの部屋だ。

「ハァー…本当についてきたよ……」

「そこため息つくな！」

「そうだそうだ！」

そんなオレのプライベートルームにうるさい二人が来た。

田中と和馬だ。

「だから田井中だって！引っ張りすぎだから！」

「そうだ律ちゃんをバカにするな！」

「心配すんな…お前のこともバカにしてるから」

「なんだとー!!」

「まあ落ちつけよ…別におまえがただのバカとは言っていない」

「ど…どういう意味だ!」

「すっげえバカと言っている」

「なめてんのか!」

こんなやりとりを無視して田井中はなにやらきよろきよろ周りを見渡していた。

それを見て何を思ったのか和馬は

「律ちゃん!コイツエロ本とか持っていないからね!安心してッ!」

オレはその言葉を聞いた瞬間剣道で鍛えた自慢の握力で和馬のこめかみを破壊しにかかっていた。

「もう一回言ってみ？ お前のこめかみを壊すから」

「痛い痛い！！もう壊してるーー！！！」

「碎けてしまえ」

そんなこともお構いなしに律はあたりを見回していた。
気にはなったがかまっていると和馬の勉強が進まないので無視することにして

「しかたねえ：勉強するか」

勉強が始まって一時間くらいたった頃オレのケータイに唯から一通のメールが届いた。

和ちゃんがサンドウィッチもってきてくれたから一緒に食べよう

的なことだった。

和馬はほっというていいか…

オレはそう考えてとりあえずオレは一階でなにやら物色している田井中にメールを送って家をでた。

なんか後ろからオレを置いてくなく！！って声聞こえたけど……まあアイツ根はMだからこの方が喜ぶよな

そんなこと考えていたらいつの間にか唯の部屋の前まで来ていた

まあウチから近いから当たり前か…

「なーにつつたてんだよ？早くはいろーぜ！」

オレは言われるがままに部屋に入っていた。

「久しぶりね悠斗」

「オッス」

この前電話して見事に裏切りをかました女がいた

「この前はありがたい助言をどうもありがとうございました！」

「それは良かった」

コノヤロウ：

いつか…いつかこの手でッ！

「どうしたの？ はやく座んなよ」

唯に促されオレはしぶしぶ座った

それから雑談タイムが始まった

女ばかりの中にオレ一人か…

うん！ 気まずい

そんな空気から逃げようとオレはおもむろにポケットからiPodを取り出しイヤホンをつけアニソンを聴いた

しばらく経ったあと和も家に帰り憂も部屋に出ていったあとオレは
睡魔に誘われ眠りについた

「…きろ…おきろ…起きろッ！」

ガンッ

「イタイ？」

頭に衝撃が走った
別に痛くもなかったがその衝撃で完全にたたき起こされた

まあとりあえず言うことは決まっていた

「オレの事を叩いた奴ダレだ？」

その声に秋山がビクツとなって

「わ…わたしだ！」

オレはゆっくりと体を起こして秋山の方に歩み寄った

そして肩にそっと手を置き

「今度からはもっと優しくしてください」

男子だったら確実にオレの逆鱗に触れていたが女子だったのでお願いで済ました

「……………」

秋山は白くなって固まってしまった

オレはおもむろに時計を見た

「もうこんな時間か…帰るか」

部屋のドアを開けて階段を下りていった

バキュンバキュン

ゲームの音がした

「また負けたー！」

そこには寝転がってゲームをしている部長がいた

「なじみすぎ…てゆうかまたって…」

「適応能力高いな…」

その後部長は引きずられるように帰って行った

「じゃあ帰るわ」

「うん！また明日〜！」

オレは平沢家をあとにした

なんか忘れてる気が：

そんなことを思いながら家に入り自分の部屋のドアを開けると

寝息を立てている和馬の姿がありました

和馬の処分方法

1 寝ている間に布団で簀巻きにします

2 次にボクサーがサンドバッグを叩くように軽やかにそして思いっきり叩きます

※この時何か道具を使っても良いです

3 最後はバックドロップで極めましょう

これさえ出来ればアナタも和馬を簡単に処分できます

第十五話（後書き）

次はオリストを入れたいと思います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8554m/>

けいおん！ ～唯とギー太と幼なじみと～

2010年11月3日13時53分発行